

小・中学生の友人関係に関する実証的研究 ～アイデンティティとの関わりを中心に～

藤田英典（東京大学） ○伊藤茂樹（聖徳学園岐阜教育大学） ○坂口里佳（東京大学大学院）

1. はじめに

小学校高学年から中学校段階にかけて、子どもたちの生活の中心は＜家族・家庭＞から、＜友人・学校＞へと移行する。この移行過程は、アイデンティティの再編を伴う二次的社会化の過程でもある。したがって、子どもたちの友人関係のありようは、アイデンティティ再編の基盤として重要な意味をもつ。本研究では、小・中学生の友人関係の構造と特質を実証的に明らかにし、アイデンティティとの関わりについて考察することを目的とする。

以下の分析は、1995年度実施「小・中学生の生活と意識に関する調査」（研究代表者：藤田英典、対象：小学5年生3380人、中学2年生3764人、対象地域：全国9都県）のデータに基づいて行う。

2. アイデンティティの基盤としての友人関係

本論に入る前に、小・中学生の友人関係のありようが、学校生活への構えを大きく左右し、またアイデンティティのありようにも影響している様子をデータによって確認しておこう。

まず「毎日の生活が楽しい（以下、生活充実）」か否かは「学校に行きたくないと思うことがある（不登校気分）」か否かに大きく左右される。生活充実と不登校気分の関連は、相関係数値にして-0.403という大きなものである。また、学校に対する構えは友人関係が安定しているか否かに大きく左右される。不登校気分と「友だち関係で嫌なことがある（嫌なこと）」との相関は0.303で、不登校気分と成績との相関（-0.146）よりもはるかに大きく、＜交友の場＞としての学校の重要性が示唆される。

さらに、アイデンティティとの関わりでは、「自分にはよいところがある（長所）」と「友だちに頼りにされている（被信頼感）」との間には、相関係数値にして0.397という大きな関連がある。この関連も、成績と長所との相関（0.249）よりも大きく、小・中学生のアイデンティティが友人関係と深く関わっていることが示唆される。

以下では、小・中学生の友人関係について、第一に友人関係の形成基盤と形態、第二に交友関係の構造、第三にアイデンティティと交友関係との関わりについて考察する。

3. 友人関係の＜グループ化＞状況の分析

(1) 友人関係の形成基盤と形態

友人関係は、個人の自由な選択や好みに基づいて形成・展開されているように見えるが、その選択の範囲や契機は構造的に制約されている。また、一対一の友人関係として展開し、それが個人にとって重要なものである場合も多いが、一般的には3人以上の集団的関係として展開する傾向がある。それゆえ小・中学生の友人関係のありようを考察する上で、友人関係の形成基盤と形態は重要な分析課題である。以下では、この点について基本的傾向を確認し、その上で、そこで展開する友人関係の特質を分析する。

表1 友人関係の＜グループ化＞状況

		(%)				
	いない	2人	3～5人	6～9人	10人～	不定
小学生男子	3.4	3.6	43.0	21.0	11.9	17.2
小学生男子 固定率(G)	—	55.9	65.6	67.0	56.7	19.3
小学生女子	2.5	9.4	57.6	16.1	4.5	9.9
小学生女子 固定率(G)	—	72.3	72.3	71.4	54.8	11.9
中学生男子	2.7	1.7	39.4	25.7	8.6	21.9
中学生男子 固定率(G)	—	84.4	68.9	72.8	64.0	31.8
中学生女子	1.5	9.1	59.6	18.9	2.7	8.2
中学生女子 固定率(G)	—	82.5	80.7	81.5	71.4	31.3

注) (G)：仲良くしている友だちがいない子どもを除く、グループがある子どもときまっている子どもに質問した項目。以下同じ。

小・中学生が「ふだん仲良くしている友だちグループ」の顕著な傾向として、次の2点が確認された。

第一に、小・中学生の友人関係の約9割が学校・学級を基盤に形成され、8割以上の子どもが特定のグループに所属している。女子の方が小規模なグループが多く、しかも約6割が3人から5人の小グループに所属している。

第二に、グループの境界は明瞭で流動性が小さい傾向がある。この傾向は男子よりも女子、小学生よりも中学生において顕著である。

しかも、このグループの規模は、ここ10数年＜小グループ化＞してきたようである。いくつかの過去の調査（中学生対象）から、10人以上の大グループの割合は減少し、3人から5人の小グループの割合が増加していることが確認されている（詳細については当日配布資料参照）。

このように、小・中学生の友人関係の多くはグループにおいて展開しているが、次項ではさらに、＜グループ化＞した交友関係のありようについて考察する。

(2)＜グループ化＞状況における交友関係

一般に友人グループは、その規模や流動性によって活動の形態や集団内の関係が異なる。小・中学生の友人関係についても、＜グループ化＞のありようによって、活動形態や関係性にさまざまな違いがあることがわかった。以下、グループ規模（「きまっていない」「いない」を含む）を指標に、＜グループ化＞状況における交友関係について調べた結果について、交友活動の男女差を確認した上で、さしあたり以下の3点を指摘しておく。

交友活動には大きな男女差が見られる。「電話でおしゃべりをする（電話）」「悩みごとを話す（悩みごと）」「異性や好きな人の話をする（異性の話）」といった親密なコミュニケーション活動は女子の方が圧倒的に多い。これに対して「休みの土曜日に遊ぶ」「空き地や公園で遊ぶ」といった集団的交友活動は男子の方が活発である。こうした交友活動の違いがグループ規模の差にもあらわれており、女子では親密な小グループが多いのに対して、男子では活動的な大グループが多くなっていると考えられる。

まず第一に、友人グループは閉鎖化する傾向があり、この傾向は女子の小グループにおいて顕著である。一般に悩みごとや異性の話のような秘密の話を共有する集団は、外部に対して閉鎖性を帯び、内部の人間関係は濃密なものとなる傾向がある。そしてこの閉鎖性と濃密性は、集団の規模が小さいほど強くなると考えられる。

第二に、軋轢や葛藤はグループ規模が小さい方が多い傾向があり、この傾向は女子および中学生の方が顕著である。女子の小グループでは閉鎖的で関係

表2 グループ規模別・交友関係の特質

	(%)					
	2人	3～5	6～9	10人～	不定	いない
悩みごと(G)						
男子	36.9	23.6	28.1	28.7	19.8	—
女子	59.2	58.5	61.8	65.2	49.9	—
電話(G)						
男子	44.6	26.4	33.4	34.7	24.3	—
女子	62.6	59.0	64.8	74.0	67.6	—
異性の話(G)						
男子	23.1	33.2	41.3	43.2	35.7	—
女子	58.1	66.2	72.0	74.4	64.9	—
音楽の話(G)						
男子	22.9	41.6	53.0	49.7	49.0	—
女子	60.2	68.0	73.3	74.0	63.9	—
土曜に遊ぶ						
男子	64.8	68.2	75.0	73.2	66.9	40.9
女子	43.3	51.9	56.7	61.0	51.5	16.7
嫌なこと						
小学生男子	46.6	35.6	35.0	39.5	41.5	40.4
小学生女子	55.5	50.8	40.9	45.9	50.0	57.5
中学生男子	48.4	37.7	32.9	29.9	34.9	52.0
中学生女子	50.9	53.5	41.2	32.6	60.7	77.7
被信頼感						
小学生男子	40.5	43.3	46.1	55.9	36.7	17.5
小学生女子	50.3	52.1	62.3	71.6	41.1	22.5
中学生男子	37.5	41.7	46.8	62.0	42.0	9.8
中学生女子	48.5	56.7	60.4	77.6	54.9	14.8

が濃密になる傾向があるが、こうした集団では軋轢や葛藤が生じやすく、また中学生のグループでは境界が明瞭で固定的になる傾向があるが、こうした集団も関係が硬直化し軋轢を生じる契機をもつと考えられる。また、集団の規模が小さいほど軋轢や葛藤が緩衝されず、問題は深刻化する可能性がある。

第三に、グループに所属していない子どもは、交友関係における軋轢や疎外の経験が多く、この傾向は、グループの流動性の低下する中学生において顕著である。また中学生男子の2人グループも同様の経験が多く、3人以上のグループが大半を占める中で、周辺的な位置におかれていると考えられる。

このように、＜グループ化＞のありようによって、小・中学生の交友活動や関係性は大きく特徴づけられている。次節ではさらに、この交友活動と関係性の関連構造について分析する。

4. 活動形態と交友関係

交友関係は、活動や規範、集団への構えなどの諸側面で構造化されている。ここでは小・中学生の交友活動と関係性（：規範や集団への構え、葛藤を含む）との関連構造を考察する。

関係性の指標として「友だちとの約束を破ることは悪いと思う（約束規範）」「友だちとの約束を破ることがある（約束違反）」「嫌なこと」「けんかや仲間割れをする（けんか）」「グループを変わりたいと思う（脱G.気分）」の5項目を用い、交友活動との関連を調べた結果について、次の3点を指摘しておく。

表3 活動形態と関係性の関連

	肯定率 (%)	約束規 範	約束違 反	嫌なこ と	けんか	脱G気 分
	94.5	11.2	43.3	27.3	10.9	
(↑肯定率・% ↓相関係数)						
<おしゃべり>						
異性の話(G)	51.4	.076	-.025	.151	.197	.028
悩みごと(G)	41.5	.091	-.046	.140	.174	**
電話(G)	44.7	.040	**	.095	.157	.031
勉強の話(G)	57.3	.056	**	.100	.129	.043
TVやマンガの話(G)	87.2	**	**	.070	.099	**
<校外での交友>						
放課後や休日に遊ぶ(G)	77.8	.063	**	-.024	.089	-.070
友だちの家に行く	73.8	**	.055	**	.051	-.038
電話でアポイント	68.9	.054	**	.060	.102	**
お互いの家を行き来(G)	54.5	**	.030	**	.129	-.032
空き地や公園で遊ぶ	36.2	**	.059	-.027	.060	**
<ポップカルチャー>						
音楽の話(G)	57.0	.081	**	.085	.090	**
本やマンガの貸し借り	39.9	.050	**	.116	.097	**
近所や商店街をぶらつく	38.0	.033	.070	.105	.139	.026
ファーストフード	31.4	.053	.026	.099	.093	**
カラオケボックス	26.5	.029	**	.078	.086	**
<TVゲーム>						
ファミコンをする	56.2	-.095	.134	-.039	**	**
友だちとファミコン	48.3	-.095	.147	-.042	**	**
ソフトの貸し借り	34.0	-.054	.136	.036	.064	**
ゲームセンター	21.0	-.075	.148	.039	.078	.024
<金銭のやりとり>						
お金の貸し借り	16.9	**	.152	.106	.139	.041
物の売り買い	16.1	-.027	.136	.058	.092	.029
<学校生活への構え>						
学校に行きたくない	50.3	-.067	.194	.303	.135	.141
ゆっくり休みたい	85.1	**	.122	.241	.080	.056

注) **: 5%水準で相関の見られなかったもの

第一に、秘密の話をすることは、交友関係における葛藤や軋轢と結びつく傾向がある。このことは先に、秘密の話の共有は関係の閉鎖化・濃密化を促進し、軋轢や葛藤を生じやすいと論じたことと整合的である。

第二に、金銭のやりとりを伴う交友活動は、交友関係における葛藤や対立に結びつく傾向がある。一般に、金銭のやりとりには責任関係が付随するが、交友関係に金銭が介在すると、それをめぐる葛藤や対立が生じやすくなると考えられる。

第三に、TVゲームのように、必ずしも協調性を必要としない活動では、交友関係において強い「約束規範」を問われることはない。

友人関係における規範や構えは、学校生活に対する構えにも深く関わっている。とりわけ友人関係における軋轢や葛藤は、交友の場としての学校に対する否定的構えとつながりやすい。

以上、小中学生の交友活動形態と関係性との関連構造を検討してきたが、次節ではさらに、交友関係とアイデンティティとの関わりについて考察する。

5. 交友関係とアイデンティティの関わりについて

アイデンティティには、自己についての了解と、自己と他者との関係についての了解という二つの側面がある（藤田1996）。小学校高学年から中学校段階にかけて、学校生活や友人関係の重要性が増大し、それに伴い子どものアイデンティティは大きく再編される。友人関係は、とりわけ自己と他者との関係の了解の側面でアイデンティティの再編と深く関わっていると考えられる。以下、小・中学生のアイデンティティが、これまで検討してきた交友関係とどのように関わっているのかを考察する。

小・中学生の自己評価および他者との関係における自己意識に関する8項目を因子分析した結果、4つの因子が析出された。この4因子を構成する2項目ずつの合成により作成した4つの変数をアイデンティティの指標として使用し（下記参照）、活動形態および関係性との関連を検討した。

アイデンティティの指標：（1）肯定的自己評価（「自分にはよいところがある」「なんでもやればできる」の合成変数、以下同じ）（2）家族意識（「親を困らせないようにする」「家族や親戚に誇りに思う人がいる」）（3）関係的自己評価（「友だちに

頼りにされている」「よその人に感謝されることがある」)(4)まなざし意識(「服装や髪型に気を使う」「自分の短所が気になる」)

交友関係とアイデンティティとの関わりは、主として「関係的自己評価」と「まなざし意識」の二つの側面においてあらわれている。この点について、さしあたり以下の4点を指摘しておく。

第一に、協調行動の側面が強い活動形態(ここではおしゃべりや校外での交友に関する項目群)は、「関係的自己評価」の基盤となっている。

表4 交友関係とアイデンティティの関連

	肯定的 自己評 価	家族意 識	関係的 自己評 価	まなざ し意識
	(↓ 相関係数)			
＜おしゃべり＞				
TVやマンガの話(G)	.051	.031	.089	.138
勉強の話(G)	.089	.122	.123	.174
異性の話(G)	.126	.080	.218	.382
悩みごと(G)	.123	.149	.264	.342
電話(G)	.050	.058	.167	.210
＜校外での交友＞				
放課後や休日に遊ぶ(G)	.093	.046	.129	.068
友だちの家に行く	.076	.025	.086	**
電話でアポイント	.080	.040	.140	.172
お互いの家を行き来(G)	.070	.059	.122	.070
空き地や公園で遊ぶ	.113	.091	.090	-.098
＜ポップカルチャー＞				
音楽の話(G)	.064	.043	.153	.313
本やマンガの貸し借り	**	**	.124	.232
近所や商店街をぶらつく	**	-.052	.102	.229
ファーストフード	.039	-.028	.126	.244
カラオケボックス	.049	**	.135	.247
＜TVゲーム＞				
ファミコンをする	**	-.077	-.080	-.181
友だちとファミコンをする	**	-.041	-.049	-.193
ソフトの貸し借り	**	-.057	**	**
ゲームセンター	**	-.089	**	**
＜金銭のやりとり＞				
お金の貸し借り	**	-.085	.028	.144
物の売り買い	**	-.069	**	.068
＜友人関係への構え＞				
約束規範	.053	.077	.058	.102
約束違反	-.097	-.092	-.126	-.049
嫌なこと	-.025	-.024	-.020	.183
けんか	.093	**	.129	.097
脱G気分	-.031	**	-.031	**

注) **: 5%水準で相関の見られなかったもの

第二に、消費や音楽行動を交友活動形態は「まなざし意識」との関連が強い。こうした活動形態は女子に多く、「まなざし意識」も女子の方が強いが、両者の相関関係には男女差は見られない。他者のまなざしへの意識や個性表出への関心は、こうした活動形態への志向性をもっており、またその交友活動を通じて「まなざし意識」が強化されと考えられる。

第三に、悩みごとや異性の話、電話のような親密なコミュニケーションは、「関係的自己評価」および「まなざし意識」と強い関連をもつ。親密性なコミュニケーションは、他者との関係における自己の有意味性を感じる基盤となる一方で、「自分はどうか思われているのだろうか」というような、他者のまなざしや評価への意識や関心をもつ契機でもある。

第四に、友人関係の軋轢や心理的葛藤は「まなざし意識」と関わっている。先に「まなざし意識」は、親密な交友関係において強いことを見たが、この意識が過剰な場合、「本当に信頼されているのか」「自分は本当はどう思われているのか」という疑問や不信感に転ずる可能性があると考えられる。前述のように、小・中学生は流動性の低い固定的なグループや、関係が濃密で閉鎖的な小グループを形成する傾向があるが、この＜グループ化＞状況は「まなざし意識」を不安や不信感に転化させる契機をはらんでいると考えられる。このことは、今日の小・中学生の友人関係がもつ難しさの一つの基盤を示唆していると考えられる。

文献:

藤田英典1993「新しい学校観をさぐる」『月刊学校教育相談』8月号、学事出版。

——1996「共生空間としての学校—学びの共同性の基盤と可能性—」佐伯ほか編『シリーズ学びと文化6 学び合う共同体』東京大学出版会。
青少年文化研究会・藤田英典1996『子どもたちの生活世界—「小・中学生の生活と意識についての調査」報告書—』(財)伊藤忠記念財団。

付記:「小・中学生の生活と意識に関する調査」は、(財)伊藤忠記念財団より助成を受けて実施された。記して感謝の意を表したい。なお、共同研究者である武内清先生(上智大学)ほか、青少年文化研究会のメンバー諸氏に感謝したい。